

表紙

「羽州莊内湯浜温泉図

同所温泉由来記

板元 白沢藤左衛門

湯浜温泉由来記

(一〇五三〜一〇五七)

てんぎ

天喜年中湯の浜村の漁父^{ぎよか}浜辺にいでゝそこゝと

ながめしに、砂の中に黒きものあり。是^{これ}まで岩ある所

にもあらずと不審におもひ近くよりて見れハ、大なる

きず

亀の疵^{きず}をうけ、いとよわりたるさまにて砂へ腹をつけ

(潜み)

ひそミいたるにぞありける。漁父ふしぎにおもひ

(思い)

(居りし)

よくよく見れハ、この亀のをりし所の砂の中に水気

(暖か)

あり、手をさしてこころみしにあだゝかなりけれハ、さ

(出る)

らハこの所に温泉いづるをしり、この湯にひたり疵口^{きずぐち}を

(癒す)

いやさんとするよと心付き、亀を引起^{ひきおこ}してその砂を

ままこのゆ

かきのけしに、温泉わきいでたり。亀ハその俣此湯に

(見え)

ひたり心よげに見へしとぞ。翌朝も浜辺にいでゝ見

しに、昨日亀のをりし所より北の方、村ぎわの砂の中

に右の亀ひそミ居たりしゆへ、この所にも湯のいづること
よとおもい、砂をかきのけしに、ここにも温泉わきいで
たり。夫それより漁父ハ日々浜辺にいでて見廻けるに、その亀
浜辺の湯にひたりおる事もあり、又ハ村ぎわの湯に

(入り居る)

入をることもありしとぞ。さて、亀の疵口日にましこゝ
ろよく、七日目にハ疵口平癒へいゆして嬉しうれげに海上にうか

びさりぬ。漁父ハ亀の命をたすけしをよろこび、心(祝に)い

るににごり酒などたべやすみけり。其夜の夢に異形いぎようの

老人来りていゝけるハ、我ハこの浦の沖に年久しくすめ

る亀なり。この頃はからずも大船よりおろせし碇いかりに

あたり、大疵を得て痛いたみミたえがたく死にいたらんとせ

しに、この浜に温泉あるを見てこれにひたり、疵口平

癒せしハ全まったくくこの湯の効なり。吾これよりこの温泉

の守護神となりて諸人の病苦を除くべしといふかと

おもへハ夢さめけり。漁父奇異の思ひをなし、村中の

(詳しく)

者へくハしく物語りせしに、皆々ふしぎにおもひ、さら

(思ひ)

(究め)

ば温泉場を仕立べしと相談をきハめ、亀のひたりし

(浸り)

ゆつぽ

(据えて)

二ツの湯を掘り、湯壺をすへ、こころこころミに村中の病氣・

はれもの とうじ (するに)
腫物の者湯治せしに、その効を得ざるものなし。其事

遠近にきこへ入湯のもの年々にまして入つどゐしとぞ。
(聞こえ) (集い)

当時上の湯・下の湯と称するもの、其旧跡にて古来亀の

湯といふしも此いわれなり。さて又漁父が夢の告を以

て村中申合せ、浜辺の岩の上に一字を建て湯蔵

権現とあがめうやまひけるに、靈験いちぢるしく、益諸病

平癒しける。此社の祭礼ハ四月朔日なり、右の亀、疵口平

癒し、海上に浮ミさりし日ゆへ祭の日に定めしといふ

つとふ。又堂岩のかたはらなる岩の下より湯のいづる所あり。

されどあまり海近き渚の事ゆへ、年久しく捨置しに

弘化三年の春、藩士堀氏入湯の時、この湯を見て村

中の者へ指図いたし、湯のいづる所を掘り大升をすへ

其上に石を多くつミのせ、底樋を以て数十間引上げ

湯壺をすへ、翌年末の秋、湯屋普請とも成就せり。

土人これを新湯といふ。この湯の効、上下の湯に異なる

ことなし。これ全く堀氏の威光なりと一村悦あへり。

古来より上の湯・下の湯二ツの所、近年新湯出で、三ツ

の湯となり、ますます益湯元はんじょうの繁昌となれりと云。

(二八五三)

嘉永五年壬子冬十月 みずのえね 風雲齋 識

(鶴岡市郷土資料館蔵―地主家文書)